箱根集会の報告（第 4 回）　**Nexus の七変化：「逆順」「省略」「分離」**

今回の投稿は箱根集会報告の第 4 回目になる。Nexus の問題について引き続いて書く。

Nexus という用語を最初に用いたのはデンマークの言語学者 Jespersen である。複数の単語（一方が主で、他方が副）があるときにその結びつきのありかた（構造）の違いで Junction と Nexus に二分した。

Junction はひとつの物に対する合成の名前である。したがって 1 個の言葉で置き換えることができる。silly person → fool、man who reads → reader のように。

一方で Nexus は 2 つの別個の概念で構成されていて、最初に出てきた概念に新たなものを付け加えて「叙述関係」を形成するものである。

それはさらに Independent と Dependent に分けられる。前者は The man reads the Bible.のような完全な文の場合である。後者の例としては I heard the man read.／ The man having read this, we left the house. ／ on the doctor's arrival のような文を挙げている。

ネット上に公開されている、彼の著作 *Essentials of English Grammar** （1933：309）には以下のような Dependent Nexus の全体像が示されている。

*https://archive.org/details/in.ernet.dli.2015.16842/page/n311

29.1$_1$. While an independent nexus forms a complete piece of communication (a sentence), a dependent nexus forms only a part of a sentence, and thus may be either a primary in a sentence (subject or object), a secondary (an adjunct) to a primary in a sentence, or a tertiary in a sentence.

A dependent nexus may take the form of either :

(1) a simple collocation of a primary and a secondary (XXIX) ;
(2) a nexus-substantive, which shares the ordinary qualities of a substantive (XXX) ;
(3) a gerund, which is a special kind of nexus-substantive (XXXI) ;
(4) an infinitive (XXXII) ; or
(5) a clause (XXXIII-XXXV).

In a clause we find the same constructions as in a sentence (subject, verb, object, etc.). The relations of what in an ordinary sentence would be the subject and object are not so simple in other forms of dependent nexus.

この図からみると、今回のワークショップで「s' p'」という記号を付けて取り上げた Nexus は Jespersen が定義する Dependent Nexus の中の (1) (3) (4) であることがわかる。

Jespersen は「主述の関係」があるもの全てを Nexus と考えたので節までも含めているが、寺島（1986：126-133）ではそれを除いて単文の中に埋め込まれている Nexus を検討し

ているのである。ただ、(2)については名詞句からどのように「主述の関係」を見つけるという点において、寺島(ibid.)が提唱する「引きもどし読み」と共通するものがある。

以下の図は Jespersen(ibid.)からの例文である。

The doctor's extremely quick arrival and uncommonly careful examination of the patient brought about her very speedy recovery;

with

The Doctor arrived extremely quickly and examined the patient uncommonly carefully; the result was that she recovered very speedily—

さてここからは Jespersen が(1)(2)(4)で挙げている例文をいくつかを引用して Nexus についての考察を深めたい。

まず最初に(1)から再帰代名詞が登場する英文を引用する。「動作の結果の Nesus」の例文として挙げられているものである。(29-1-5 節、p.311)

You will lay <u>yourself open to censure</u> if you go on.
もしそれを続ければ、あなたは自分の身を非難にさらすことになるだろう。
We slept <u>himself sober</u>. 私たちは寝て、酔いを醒ました。
I stripped <u>myself stark naked</u>. 私は服を脱いで、素っ裸になった。
The novel with which he had read <u>himself to sleep</u>.
彼がそれを読んで眠りに就いた小説

どうしてこれらの文を引用したかというと、先の投稿で以下の英文の下線部について「動詞 V と再帰代名詞 O の結びつきが強い」という理由で Nexus と認定しなかったことが気になっていたからであった。

3 Soapy's mind became cognisant of the fact that the time had come for him to resolve <u>himself into a singular Committee of Ways and Means</u> to provide against the coming rigour.
43 An instantaneous and strong impulse moved him to battle with his desperate fate. He would pull <u>himself out of the mire</u>; he would make a man of himself again; he would conquer the evil that had taken possession of him.

resolve には、resolve into ～という自動詞としての表現があり、pull も「引く」のは自分の方向に決まっているので当然に自動詞としても使える。ということは、わざわざ再帰代名詞を出した理由は、話者が動作の結果、その再帰代名詞がどうなったのかを示すことを発話時に想定していたとも考えることができる。であるならば、himself と into ～、pull と out of ～は「意味上の主述関係の結合」、すなわち Nexus とみなしても間違いではない

という気がしてきた。

次に「逆順 Nexsus」の例を紹介する。「p' + s'」という順序に出てくる。例外的だが、「p'」が短いので認められるとしている。試訳を以下に載せた。　（29-1-6 節、p.312）

He *cut short* all interruptions.
By now they must have *made good* (=effected) their retreat.
This amounts to *letting loose* a tiger on a crowd.
He has *seen fit* to escape.

彼は全ての説明を端折った。
　＜ He cut all interpretations short.
今までに彼らは自分のたちの損失を償ったに違いない。
　＜ By now they must have made their retreat good.
これは虎を群衆に解き放つに等しい。
　＜ This amounts to letting a tiger loose on a crowd.
彼は（不本意ながら）逃げることがよいと判断した。
　＜ He has seen to escape fir.

今回の教材の中にも同様な「逆順 Nexus」な例がひとつあった。

42　He viewed with swift horror the pit into which he had tumbled, the degraded days, unworthy desires, dead hopes, wrecked faculties and base motives that made <u>up his existence</u>.　＜ made his existence up　彼の存在が出来上がるように作る

次の例文は「省略 Nexus」とも言うべきものである。「s'」が "自明の目的語" として表現されていない。　（32-4-2 節、p.339）

Live and let live.
The children made believe that they were Indians.
I have heard say that your country is very beautiful.
They all helped lay the table for tea.

自分の人生を生きよ、そして他の人にもその人生も生きさせよ。
　Live your life and let **others** live their own lives.
子どもたちは自分たちがインド人であると信じこまされた。
　The children made **themselves** believe that they were Indians.
私はあなたの国はとても美しいと言われるのを聞いています。
　I have heard **people** say that your country is very beautiful.
彼らはみなテーブルにお茶の用意をするのを手伝った。
　They all helped **the host** lay the table for tea.

このような「省略 Nexus」の例は今回の教材の中にも 2 例あった。

2　At the corners of four streets he hands his pasteboard to the North Wind, footman of the mansion of All Outdoors, so that the inhabitants thereof may make ready.

= make **themselves** ready

16　"Now, get busy and call a cop," said Soapy. "And don't keep a gentleman waiting."

= get **yourself** busy

なお、このように「自明の目的語」を復元して熟語や句動詞の意味を解明する方法は、寺島(2000：197-208)ではじめて提起され、寺島美(2002：50-66)、山田・寺島(2006)、同(2007)においてその仮説の有効性が検証されている。

上記の他にも以下のような慣用表現が Nexus の例として示されていた。なお、ago は go の前の形で今は廃れて使われていない。agone はその過去分詞形であるとの説明があった。Jespersen は言及していないが、末尾の ne が脱落して ago となったのだろう。

He came back <u>a few minutes ago</u>.　二三分が経ってから

We met <u>face to face</u>.　こちらの顔が相手の顔に向いている状態で

いま「逆順 Nexsus」「省略 Nexus」の例を紹介したが、最後に「分離 Nesus」の例を以下に示す。　（前者は 11-2-1 節、p.107、後者は 32-5-1 節、p.343）

He happened to fall.
He is sure to turn up.
He is believed to be rich,—

He seems *to be all right.*
They would be certain *to miss him.*
She is not likely *to be up so early.*
I fail *to see* any justification for his behaviour.

Jespersen は最初の He happened to fall. について以下のように説明している。

there can be no doubt as to the grammatical subject : it is *he*. But notionally the matter is not so simple : we cannot in the usual way ask : " Who happened ? " " Who is sure ? " " Who is believed ? " We must either complete these questions by adding *to fall*, etc., or else we must ask : " What happened ? " " What is sure ? " " What is believed ? " We thus discover that the notional subject is really a complete nexus, in which *he* is the primary, and *fall*, *turn up*, and *be rich* respectively is the secondary (adnex). We may express this in an unidiomatic way by saying that the notional subject, which is thus split in two, is *he-to-fall*, etc. Cf. **29.**1_1 and **32.**5.

寺島(1986 : 133)において He is sure to succeed.という文の「s' p'」を以下のように付けているが、Jespersen の説明にしたがうとそれとは別の表記となる。

寺島(1986)	Jespersen(1933)
He is sure to succeed.	He is sure to succeed.
s' p'	s'_1 p' s'_2

寺島は文の一部分の Nexus をとらえ、Jespersen は文全体の Nexus をとらえていると考えられる。つまり、Jespersen の指摘する主語「$s'_1 + s'_2$」の中に寺島の指摘する Nesus「s'+p'」が埋め込まれているのである。

よってこの英文は次のような二重の Nexus 構造を持っていると言えるだろう。

He is sure to succeed.
s' p' → He will succeed.
||
s'_1 p' s'_2 → ［That he will succeed］ is sure.

今回の教材の Nexus 探しにおいて、段落 4 の次の文について「これも Nexus とするのですか」という質問があった。私の記憶では住田さん（鹿児島・高校）からの質問だったと思うが、私は「これは入れません」と答えた。

しかし、上記の分析が正しければこの文には 2 つの Nexus があったことになる。

4 Three months of assured board and bed and congenial company, safe from Boreas and bluecoats, **seemed** to Soapy the essence of things desirable.

以上ここまでで、今回の Nexus の問題についてはいったん終わりにする。(2012/01/12)

付記

別件で少し追記する。第 1 回目の投稿で私は「年明けの授業では上記の 2 本の記事を配

布して紹介し、ヴェルチェックの方は一部分を読み合わせしたいと思う」と書いたが、その通りにはしなかった。というのは「どんな美味しい料理でも与えすぎはかえってよくない」という寺島先生の言葉を思い出したからだ。配ったのは 3 枚だけ。『アジア記者クラブ通信』の表紙と最後の「あとがき」、寺島先生の翻訳の最初の 2 枚、美紀子先生の翻訳の最初の 2 枚。それぞれを裏表印刷して 3 枚である。読み合わせたのは「あとがき」の一部のみであとは自分の言葉で語った。そして最後に「興味ある人は続きをあげるから取りにきなさい」と言っておいた。（2020/01/12）